

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-131	12-008	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
<b>題名 (原題/訳)</b>		
<p>A prospective cohort study of the prevalence of growth, facial, and central nervous system abnormalities in children with heavy prenatal alcohol exposure.</p> <p>胎児期多量飲酒暴露児における成長障害・顔面奇形・中枢神経障害の有病率に関する前向きコホート研究</p>		
<b>執筆者</b>		
Kuehn D, Aros S, Cassorla F, Avaria M, Unanue N, Henriquez C, Kleinstauber K, Conca B, Avila A, Carter TC, Conley MR, Troendle J, Mills JL.		
<b>掲載誌</b>		
Alcohol Clin Exp Res. 2012 Oct;36(10):1811-9.		
<b>キーワード</b>		
飲酒、妊娠、胎児性アルコール性障害、成長障害、神経発達		
<b>要 旨</b>		
<p><b>背景：</b></p> <p>胎児期に大量飲酒の暴露を受けた子供の多くは、胎児性アルコール症候群 (FAS) を発症しない。しかしながら、胎児性アルコール性障害 (FASD) の各コンポーネント発症リスクに関した、一般住民を対象とする追跡データは限られている。</p> <p><b>方法：</b></p> <p>チリの前向きコホート研究において、最初の出生前健診を受けた女性 9,628 名 から、101 名の妊娠中 4 飲酒単位/日 以上の飲酒者 (暴露群)、および対照として 101 名の非飲酒者 (非暴露群) を選択した。 妊娠期間を通し飲酒量に関する詳細データを収集した。子供は 8.5 歳になるまで、暴露状況を知らない医師により発達状況を評価された。</p> <p><b>結果：</b></p> <p>一個以上の機能性中枢神経障害は、暴露児の 44.0% (22/50)、非暴露児の 13.6% (6/44) に認められた (<math>p = 0.002</math>)。成長障害は暴露児の 27.2% (25/92)、非暴露児の 12.5% (12/96) に認められた (<math>p = 0.02</math>)。顔面奇形は暴露児の 17.3% (14/81)、非暴露児の 1.1% (1/89) に認められた (<math>p = 0.0002</math>)。暴露児 59 名あたり、少なくとも一つの障害が認められたが、全く障害が認められないものも 12 名 (20.3%) いた。受胎から妊娠自覚までの間の一過性多量飲酒 (一機会増加ごとのオッズ比 <math>OR = 1.48</math>, 95% 信頼区間 <math>CI: 1.15</math> to <math>1.91</math>, <math>p = 0.002</math>)、妊娠自覚後の一過性多量飲酒 (一機会増加ごとの <math>OR = 1.41</math>, 95% <math>CI: 1.01</math> to <math>1.95</math>, <math>p = 0.04</math>)、受胎から妊娠自覚までの期間の週あたり総飲酒量 (一飲酒単位上昇ごとの <math>OR = 1.02</math>, 95% <math>CI: 1.01</math> to <math>1.04</math>, <math>p = 0.0009</math>) は、いずれも有意に児の障害と関連していた。</p> <p><b>結論：</b></p> <p>妊娠中の多量飲酒暴露により、80%の児に一つ以上のアルコール関連障害が発生していた。飲酒パターンの中でリスクが最大だったのは、一過性多量飲酒および週当たりの総飲酒量であった。最も高頻度に見られる機能性神経障害は、医師に対して妊娠中の飲酒を警告するサインとして最適である可能性がある。</p>		